

こちら危機管理課お天気相談所

～気象防災アドバイザーによるすぐに役立つ気象情報を月1で配信～

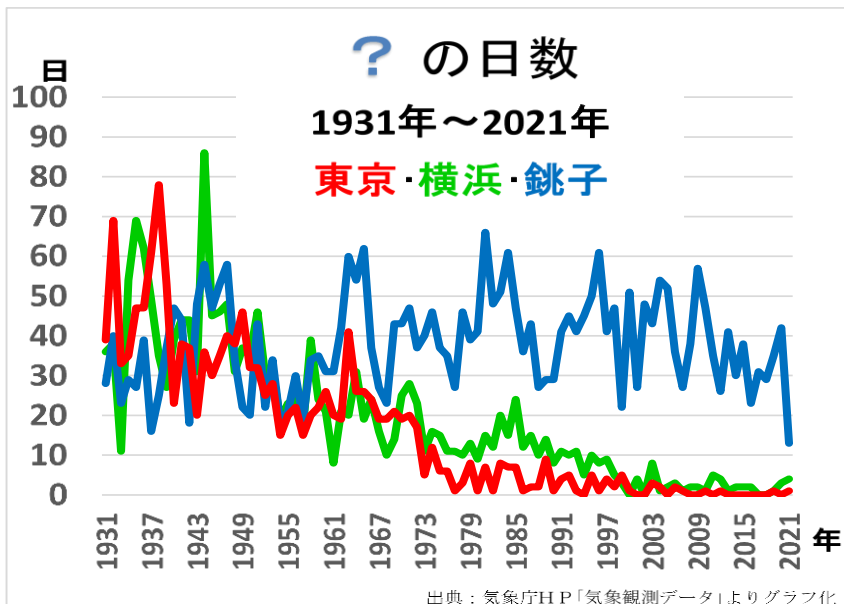
※気象防災アドバイザーとは「地域の気象に精通し、地方公共団体の防災対応を支援することができる人材」として気象庁が委嘱した方です。



Yoshiaki Yano

こんなに減少、何の現象？

ご年配の方から、“昔の天気はこうだった、最近は・・・”、などと言ったお話をお伺いすることがよくあります。そのほとんどは地球温暖化に伴う気温や雨の降り方などが変化しているというものが多いのですが、いろいろな気象観測データを見てみると、目を疑うような



激変に気づくことがあります。その一つをグラフにしてみました。ここで皆さまにご質問です。左のグラフはある気象現象が現れた年間の日数を示しています。東京と横浜では明らかに減少、銚子ではほぼ横ばい、さて、何の現象でしょうか？ 少しお考えになってから先をお読み下さい。各地の地理的な特徴や街の違いも考え合わせて下さい。

東京・横浜で、1930～1950年頃は年間30～50日も現れていたのに、ここ20年ほどは殆ど見られなくなった現象とは、“霧”です。しかし、太平洋に突き出し、都市化がさほどではない銚子では、このような減少傾向は見られません。

霧は0.01mmほどのごく小さな水滴で、落ちる速度も遅く、大気中に漂っているように見える現象です。水平方向の見通し(視程)が1km未満のときを指し、“もや”は1km以上、10km未満の場合を指します。因みに、霧と煙が混じったものを“スモッグ”と呼ばれることもあります。霧の中では湿っぽく、やや冷たく感じられ、湿度は一般に100%近くになっています。十分に光が当たっているときは、一つ一つの霧粒を肉眼で見分けられることもあります。

都市化が進むに伴い裸地や緑地が、アスファルトの道路やコンクリートの建物で埋め尽くされ減っていきました。このため地表から大気への水分の補給が減少し、空気の乾燥も進みました。またアスファルトやコンクリートの熱容量は大きく、昼間太陽によって温められたものが、夜になっても温度が十分下がらないため、寒暖の差が少なくなり、空気中の水蒸気が露を結ぶことも少なくなり、霧の発生も減少してしまいました。

東京で霧が発生すると、貴重な現象を体験することになります。ちょっとしたニュース、交通に支障が出るほどの濃霧にもなると、大ニュースになるかも・・・。